

# オホーツクの農業2022

*Agriculture in Okhotsk*

## (目 次)

I	オホーツクの概要	1
II	オホーツクの農業の概要	3
III	農業構造	5
IV	農業の担い手	8
V	農 産	14
VI	酪農・畜産	23
VII	食の安全・安心、付加価値向上	26
VIII	加 工	29
IX	農業農村整備事業	32
X	農業関係機関	34
XI	農業関係団体	36
XII	オホーツク総合振興局農業関係部署の概要	38



## トピックス ~~~~~

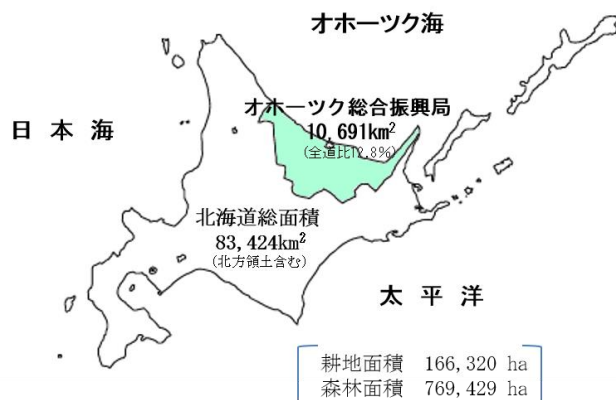
①	オホーツク有機農業フェア in 大空の開催	7
②	農村を支える多様な担い手確保推進事業	12
③	令和4年度畜産GAP研修会の開催	13
④	第2回 オホーツク・ビーンズセミナーの開催	31

# I オホーツクの概要

## 1 位置

オホーツク地域（オホーツク総合振興局管内）は、北海道の北東部に位置し、オホーツク海と 280km の海岸線で接しており、南北に約 80km、東西に約 200km の広がりがあります。総面積は 10,691km<sup>2</sup>（秋田県に匹敵）と全道の 12.8% を占め、宗谷・上川・十勝・釧路・根室の各総合振興局・振興局と境界を接しています。

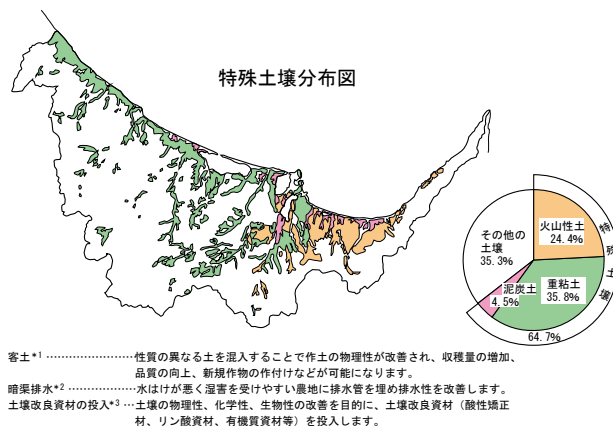
管内は、比較的なだらかな起伏に富み、オホーツク海岸部から南西及び南東に向かって標高が段階的に上昇しています。オホーツク海沿岸部には平地が多く、海岸から平行して低地・台地・丘陵地・山地という基本的な配列となっています。



## 2 土壌

管内は、道内で最も多様な農地の土壌種類が分布している地域であり、特殊土壌と呼ばれる泥炭土、火山性土及び重粘土が大半を占めています。

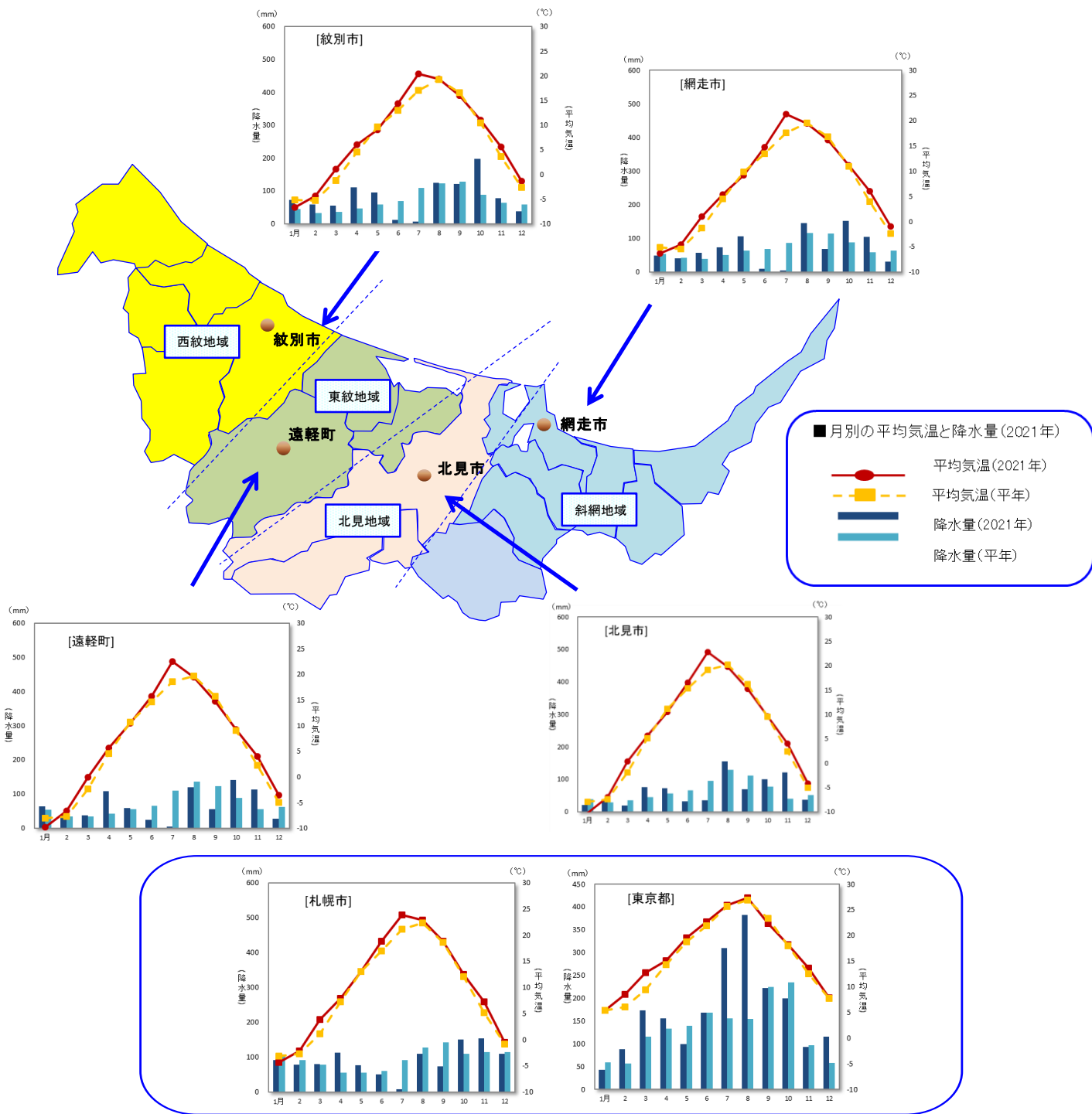
これらの特殊土壌は冷涼な気候とともに作付作物を制限し、生産性を低下させる大きな要因となってきましたが、主に戦後になってからは、客土\*<sup>1</sup>、暗渠排水\*<sup>2</sup>、土壌改良資材の投入\*<sup>3</sup>等、農地を改良する努力が続けられ、その結果、近年では、まだまだ改良の余地があるものの他の地域に劣らない生産性の高い農業が営まれています。地域別に見ると、網走・北見・置戸を結ぶ線の西側が重粘土地帯、東側が火山性土地帯に大別され、地下水位が高い低地に泥炭土が散在している形態となっています。



## 3 気象

管内の平均気温は5～6度で、道内では宗谷、根室地方に次いで低くなっていますが、農耕期間の気温は15～16度とこれらの地域より高く、畑作を中心とした低温に適応する農作物の生産が可能で、積算気温が比較的高い内陸部では、稲作が営まれているところもあります。しかし、気象の変動が大きく、オホーツク海高気圧の出現などによって極端な低温や日照不足による度々の冷害、遅霜（平年終霜5月10日前後・平年初霜10月20日前後）、また春先の強い南西風による風害など、農業にとって厳しい気象条件下にあります。年間の降水量は、600～800mmで、全道で最も少ない地域となっており、積雪量は70cm前後で全道の中でも少ない地域となっています。

令和3年は平年と比べて融雪が早かったため、耕起作業は平年よりやや早く進んだが、4～5月にかけて雨の日が多かった影響もあり、てん菜の移植や馬鈴しょの植付作業は平年よりやや遅れて終了しました。6～7月にかけて降水量が極端に少なく、7月中下旬は気温が平年よりかなり高く推移したことから、作物によっては生育が停滞するなどの影響が見られました。8月以降は適度に降雨があるなど安定した気象経過で推移したことから、生育の回復が見られ、各作物の収穫作業もおおむね平年並みに進んだが、10月下旬から雨が続いたため、豆類の収穫に遅れが生じました。収量については、小麦、てん菜は平年を上回り、玉ねぎ、馬鈴しょは平年を下回りました。



## 4 人 口

管内の人口は、昭和 35 年(1960 年)は、約 42 万 5 千人でしたが、昭和 50 年代の一時期を除いて減少が続いており、令和 4 年(2022 年)は約 26 万 9 千人と昭和 35 年の 6.3 割程度となっています。

市部と町村部に分けてみると、北見・網走・紋別の三市における人口は、約 16 万 9 千人と管内の約 6 割を占めます。

一方、町村部における人口は、約 10 万人となっており、中には平成 29 年(2017 年)から令和 4 年(2022 年)の 5 年間の人口減少率が管内平均が 8%に対し、13%を超えるところもあるなど、過疎化が進行しています。

また、年齢別人口で見ると、管内の老年人口(65 歳以上人口)は 35.5%となっており、高齢化も進行しています。

## II オホーツクの農業の概要

### 1 北海道農業に占めるオホーツク農業の割合

区 分 (単 位)	オホーツク	北海道	対北海道比 (%)	調査年次
耕地面積 (ha)	165,390	1,141,000	14.5	R4
田 (ha)	1,614	221,600	0.7	R4
畑 (ha)	163,950	919,900	17.8	R4
農家戸数 (戸)	3,958	37,594	10.5	R2
販売農家 (戸)	3,632	38,086	9.5	R2
作付面積				
水稲 (ha)	940	96,100	1.0	R3
小麦 (ha)	28,800	126,100	22.8	R3
大麦 (ha)	1,300	1,740	74.7	R3
てん菜 (ha)	22,900	57,700	39.7	R3
大豆 (ha)	3,080	42,000	7.3	R3
馬鈴しょ (ha)	15,300	47,100	32.5	R3
たまねぎ (ha)	7,997	14,600	54.8	R3
収穫量				
水稲 (t)	5,440	573,700	0.9	R3
小麦 (t)	188,000	728,400	25.8	R3
大麦 (t)	6,510	7,760	83.9	R3
てん菜 (t)	1,587,000	4,061,000	39.1	R3
大豆 (t)	7,420	105,400	7.0	R3
馬鈴しょ (t)	594,300	1,686,000	35.2	R3
たまねぎ (t)	370,490	665,800	55.6	R3
飼養頭羽数				
乳用牛 (頭)	116,996	829,900	14.1	R3
(1戸当たり) (頭)	148.3	145.3	102.0	R3
肉用牛 (頭)	66,322	536,200	12.4	R3
(1戸当たり) (頭)	219.6	236.2	93.0	R3
生乳生産量 (t)	623,648	4,265,600	14.6	R3

資料：農林水産省「耕地面積調査」、「作物統計調査」、「畜産統計調査」、「牛乳乳製品統計調査」  
「農林業センサス」

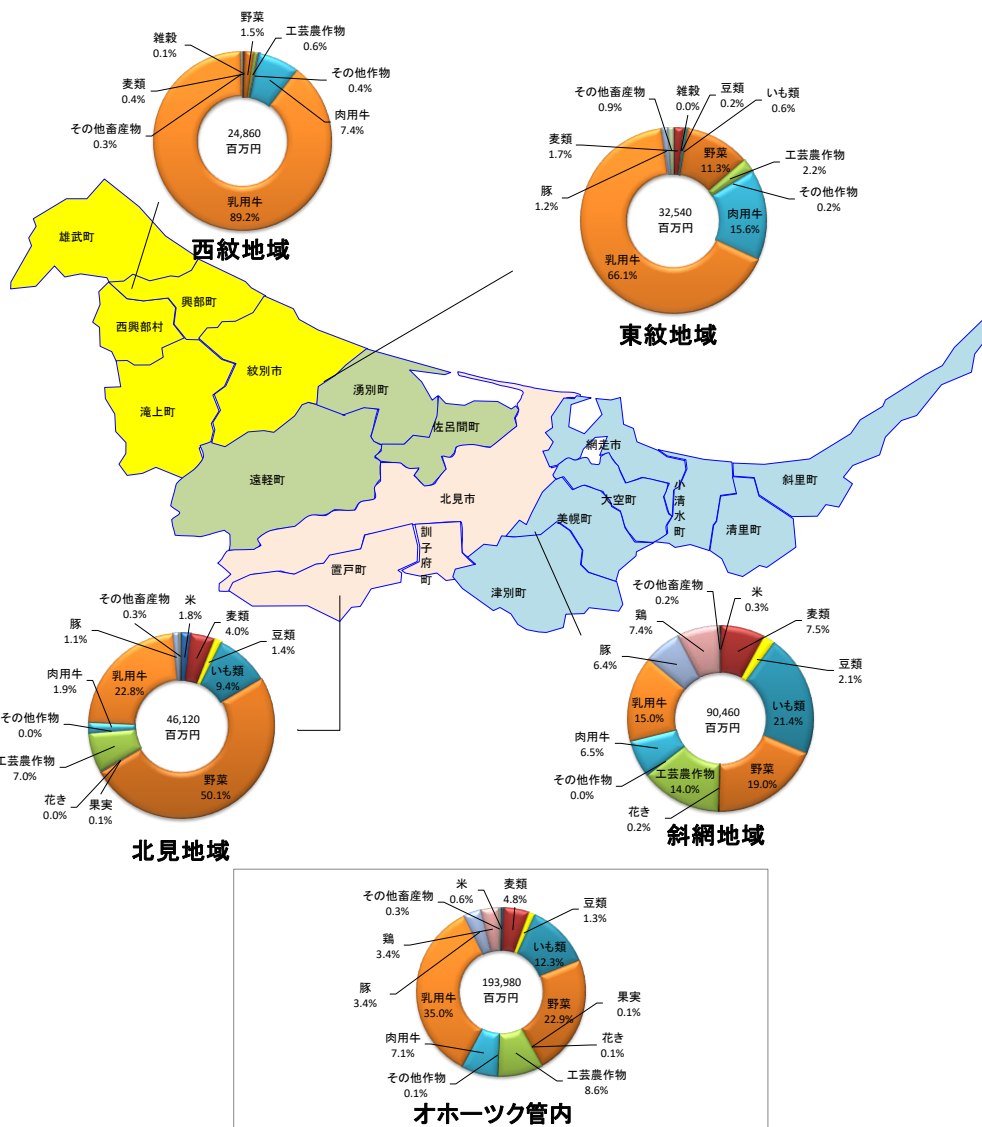
\*一部「オホーツク総合振興局調べ」

### 2 地域別農業の特色

管内は気象条件・土地条件などの自然的条件と経済的條件の違いによって斜網・北見・東紋・西紋の4地域に大別され、それぞれの条件を生かし、地域ごとに特色ある農業が展開されています。

斜網地域 (網走市・大空町・美幌町・津別町・斜里町・清里町・小清水町)	てん菜・馬鈴しょ・麦類を中心に機械化された大規模な畑作農業を展開する地域であり、斜網地域だけで管内農業産出額の耕種部門の59%を占めます。
北見地域 (北見市、訓子府町、置戸町)	たまねぎ等の野菜を基幹として、水稲・酪農などの生産性の高い農業を展開する地域で、特にたまねぎは全道収穫量の37%を占める大産地です。1戸当たり耕地面積は29.1haと狭いものの、10a当り農業産出額では130千円と管内トップです。
東紋地域 (佐呂間町、湧別町、遠軽町)	酪農を基幹として、たまねぎ・かぼちゃ・ブロッコリー・アスパラガス等の野菜や青しそ等の特用作物などに取り組み、工夫をこらした農業を展開する地域です。1戸当たり耕地面積は49.1haと酪農地帯としては狭く、1戸当たり農業産出額は6千円と管内平均を上回ります。
西紋地域 (紋別市、滝上町、興部町、西興部村、雄武町)	草地等の土地基盤を活用した大規模な酪農を展開しており、1戸当たり耕地面積は118.3haと管内では最も大きい地域です。農業産出額に占める畜産の割合は96%を超え、1戸当り農業産出額は9千7百円と管内平均を大きく上回ります。

# 農業産出額の品目別割合 (令和2年)



## 地域別農業統計等の比較

区 分	オホーツク管内	斜網地域	北見地域	東紋地域	西紋地域
農 家 戸 数 (R2)	3,958 戸	1,957 戸	1,220 戸	527 戸	254 戸
耕 地 面 積 (R4)	165,390 ha	73,920 ha	35,550 ha	25,880 ha	30,040 ha
1戸当たり耕地面積 (参考)	41.8 ha	37.8 ha	29.1 ha	49.1 ha	118.3 ha
農 業 産 出 額	193,980 百万円	90,460 百万円	46,120 百万円	32,540 百万円	24,860 百万円
( R2 )					
う ち	52,180 百万円	40,310 百万円	10,010 百万円	1,560 百万円	300 百万円
畑 作					
う ち	67,480 百万円	13,440 百万円	10,500 百万円	21,460 百万円	22,080 百万円
酪 農					
う ち	44,060 百万円	16,980 百万円	23,040 百万円	3,660 百万円	380 百万円
野 菜					
1戸当たり農業産出額 (参考)	49,010 千円	46,224 千円	37,803 千円	61,746 千円	97,874 千円
10a当たり農業産出額 (参考)	117 千円	122 千円	130 千円	126 千円	83 千円

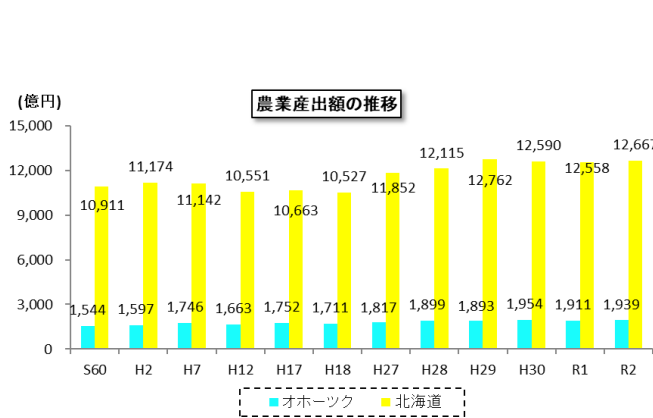
資料：農家戸数/農林水産省「農林業センサス」 耕地面積/農林水産省「耕地面積調査」  
 農業産出額/農林水産省「市町村別農業産出額 (推計)」  
 1戸当たり耕地面積及び農業産出額、10a当たり農業産出額は上記データから算出

注1)：農業産出額の「うち畑作」は麦類・雑穀・豆類・いも類・工業農作物。

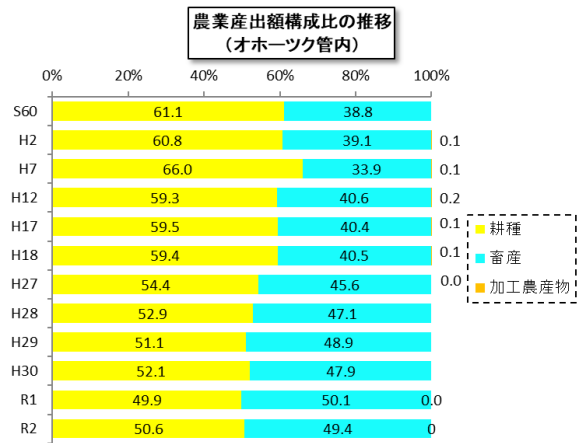
注2)：ラウンドの関係で、オホーツク総合振興局と各地域の合計は必ずしも一致しない。

### 3 農業産出額

管内の農業産出額は、令和2年（2020年）は1,939億円となりました。農業産出額の構成比は、耕種、畜産ともに約5割となり、畜産は増加傾向で推移しています。



資料：農林水産省「生産農業所得統計」、「市町村別農業産出額（推計）」

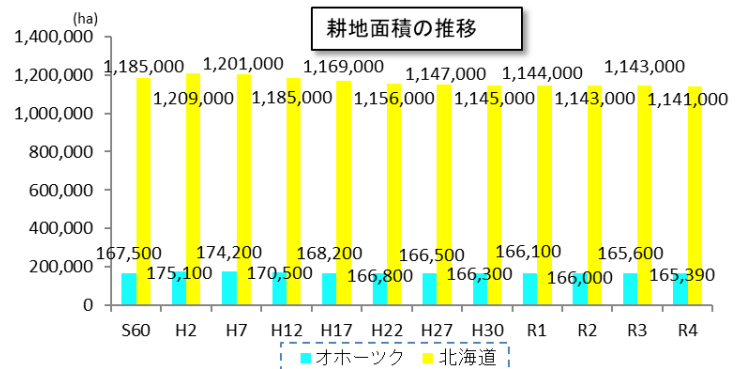


資料：農林水産省「生産農業所得統計」、「市町村別農業産出額（推計）」

## Ⅲ 農業構造

### 1 耕地面積

耕地面積は、北海道・管内ともに微減傾向にあります。令和4年（2022年）の管内の耕地面積は165,390haとなっています。

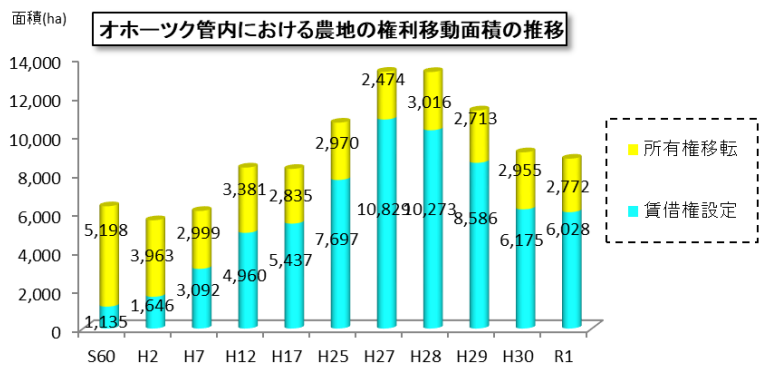


資料：農林水産省「耕地面積調査」

### 2 農地の権利移動

管内における耕作目的の農地の権利移動面積は、平成12年度以降、農地法の改正により農地権利移動の規制が緩和されるとともに、農業経営基盤強化促進法の改正により担い手への農地利用集積に向けた措置が拡充され、平成26年度には農地中間管理事業の推進に関する法律に基づく農地中間管理事業が開始されたことにより、増加傾向で推移してきましたが、担い手への農地の集積率が高まり、平成29年以降は権利移動が減少傾向にあります。

このうち、農業経営基盤強化促進法に基づく農地の権利移動が主体となっており、令和元年では全体の8割近くを占めています。



資料：農林水産省「農地の権利移動・賃借等調査」

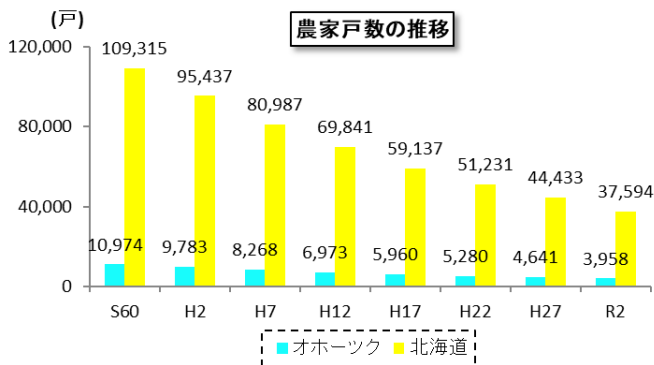
注) 農地の権利移動面積は、農地法第3条、農業経営基盤強化促進法、農地中間管理事業の推進に関する法律に基づく、農地及び採草放牧地の所有権移転面積と賃借権設定面積である。



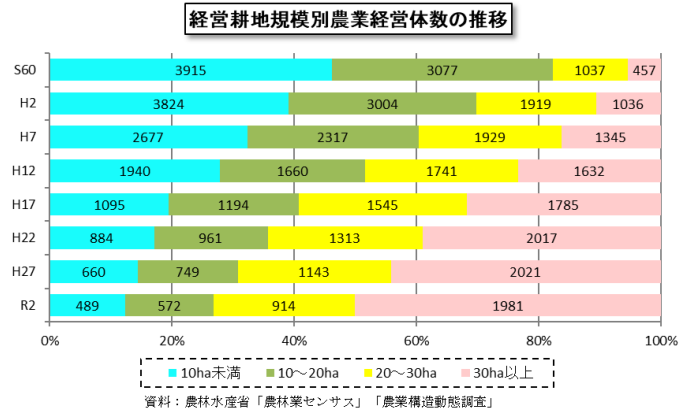
### 3 農家戸数

農家戸数は、北海道・管内ともに減少を続けています。

また、経営耕地面積規模別の農業経営体数の推移を見ると、30ha以上の経営体の割合が、平成22年（2000年）と比べ令和2年（2020年）は、39%から50%になり、経営規模の大きい農家の割合が増加しています。



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

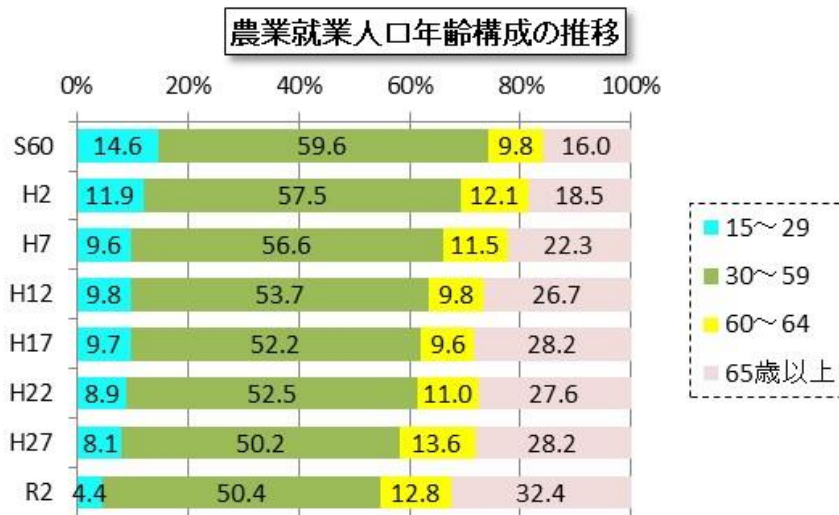


資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

### 4 基幹的農業従事者数

個人経営体の基幹的農業従事者数は、北海道・管内ともに減少を続けています。管内では、令和2年（2020年）は8,800人となり、昭和60年（1985年）の3万2千人と比べ7割以上減少しています。

また、年齢構成は60歳以上が昭和60年以降増え続けていることから、高齢化が見られ、令和2年（2020年）には60歳以上が45.2%を占めています。



資料：農林水産省「農林業センサス」「農業構造動態調査」

## トピックス①【オホーツク有機農業フェア in 大空の開催】

有機農業は、化学合成農薬や化学肥料を原則使わないなど環境負荷を低減した農業生産の方法であり、持続可能な開発目標（SDGs）の達成に寄与するほか、安全・安心な農畜産物を求める消費者のニーズに応えていくために必要な取組です。国が令和3年5月に策定した「みどりの食料システム戦略」では、2050年までに耕地面積に占める有機農業の割合を25%、100万haに拡大する目標が掲げられており、道が令和4年3月に策定した「北海道有機農業推進計画（第4期）」においても、2030年度までに有機農業面積を1.1万haと2.3倍に拡大する目標を掲げています。

一方で、有機農業の価値が消費者に十分に理解されず、消費につながっていないという課題もあることから、振興局では、オホーツク管内の有機生産者などからなる「オホーツク有機農業ネットワーク」との共催により、これまで有機農業の技術向上を図るための現地研修や、理解醸成に向けたセミナーの開催等の活動を行ってきました。令和4年度は有機農産物の消費拡大や有機農産物の価値の理解醸成をさらに図るため、令和4年10月16日（日）に道の駅メルヘンの丘めまんべつにて、「オホーツク有機農業フェア in 大空」を開催しました。

フェアでは、ネットワーク役員を含む管内の農業者を中心とした10団体が出展し、かぼちゃ、玉ねぎ、にんじん、そば、牛乳などの有機農産物や有機加工食品を来場した消費者に直接販売しました。また、振興局のブースでは、有機農業や化学肥料や化学合成農薬の使用を低減した取組である「Yes!clean 農産物」の取組について来場者に紹介するほか、有機農業のアンケートの回答者に管内で生産された有機かぼちゃを使用したおはぎを配付しました。当日会場にはオホーツク管内の方や観光客など多くの来客があり、有機農業や有機農産物を消費者へ知ってもらう良い機会となりました。

管内の有機農業面積は振興局別では全道で最も大きく、約1,700ha(令和3年3月末時点)となっています。オホーツク総合振興局では今後も全道を牽引すべく、有機農業ネットワークはじめ関係機関・団体と連携しながら、有機農業の取組や消費拡大、理解醸成に向けた取組を行っていきます。



有機農業フェアの会場の様子



有機野菜を販売している様子



## IV 農業の担い手

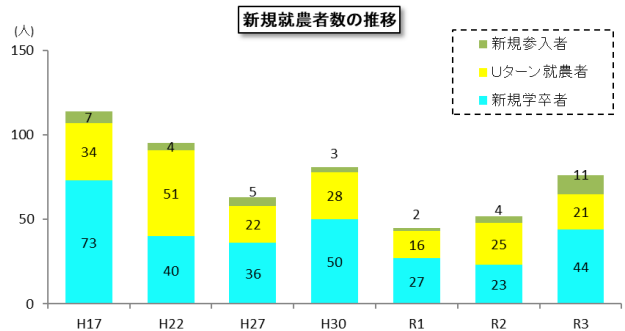
### 1 新規就農者

管内の新規就農者数は、令和元年以降は60人を下回っていましたが、令和3年の新規就農者の数は76人であり、前年よりも24人増加しました。

新規就農者のうち、「新規学卒就農者」は、平成17年以降は減少傾向で推移していましたが、令和3年は、前年よりも21人増加し44人となっています。

「Uターン就農者」は、平成25年以降は30人前後で落ち着いており、令和3年は前年より4名減少し21人となりました。

「新規参入者」は、毎年数名でしたが、令和3年は11人となり、ここ10年で最も多くなりました。



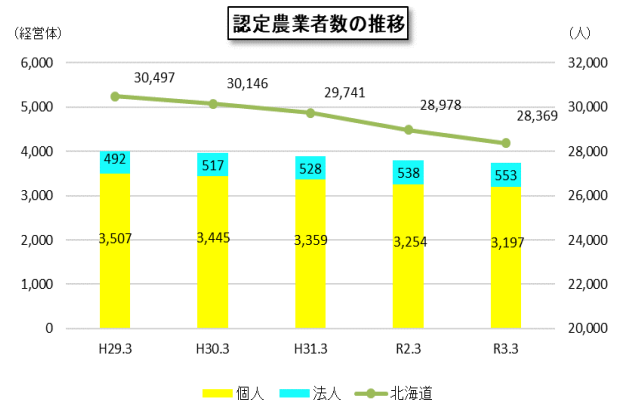
資料: オホーツク総合振興局農務課調べ  
 注1) 「新規学卒就農者」とは、農家出身者で学校を卒業後、直ちに就農した者  
 注2) 「Uターン就農者」とは、農家出身者で他の産業に従事した後、就農した者  
 注3) 「新規参入者」とは、非農家出身者で新たに農業経営を開始した者

### 2 認定農業者

管内の認定農業者数は、令和3年3月末時点で、3,750経営体となっています。

近年の認定農業者数は、高齢化等を背景に減少傾向で推移していますが、認定農業者のうち法人の数は、前年と比べ、15法人増加し、553法人と年々増加する傾向にあります。

国の農業経営に関する各種施策等は、認定農業者を主とする「担い手」に集中・重点化しています。



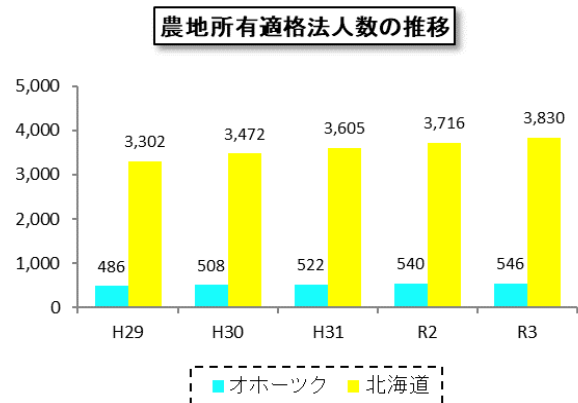
資料: オホーツク総合振興局農務課調べ

### 3 農地所有適格法人

管内の農地所有適格法人数は、増加傾向にあり、令和3年1月1日時点で546法人となっています。

農業経営の法人化は、家計と経営の分離により経営管理能力や対外信用力が高まるほか、給与制、休日制及び社会保険などの整備により優れた人材を確保しやすく、規模拡大や経営の多角化が容易になるなどのメリットを有しています。

特に近年、複数戸による農地所有適格法人には、地域の中核的な担い手として離農者などの農地や農作業の引き受け手、新規就農者の受け入れとなるなど、公益的機能の発揮が期待されています。



## 4 北海道指導農業士・北海道農業士

本道農業の発展と地域社会の活性化を図るため、次代の農業の担い手の受入・指導や地域農業の振興に対する助言・協力を行う優れた農業者を「北海道指導農業士」として、地域農業の振興等に積極的に参加協力を行う農業者を「北海道農業士」として、それぞれ市町村長の推薦を受けて知事が認定しています。

管内では、令和4年12月現在で、指導農業士123名、農業士222名が認定されています。

## 5 農村女性グループ

管内では、簿記や経営管理の学習、農畜産物の直売や加工など、幅広い農村女性のグループ活動（令和4年3月現在、36グループ）が行われており、農業経営の改善をはじめ、消費者との交流や食文化の伝承など農業・農村への理解促進に貢献しています。

また、平成13年には、各グループの交流を目的としたオホーツク農村女性ネットワーク「kirari ウェルカム」が設立され、交流と学習の場である「農村女性のひろば」の開催など活動の輪が広がっています。

## 6 青年農業者クラブ

20代～30代前半を中心とした青年により構成される青年農業者クラブ（令和4年12月現在、14クラブ）は、交流会や学習会等の活動を通じて、農業経営・技術の向上や仲間づくりなどの自己研鑽のほか、地域農家への新技術の提案、子どもの農業体験指導にも取り組むなど、次代の担い手育成の場となっています。

## 7 地域農業支援システム

経営の規模拡大に伴う過重労働、担い手の減少、農作業従事者の高齢化などに対応し、労働負担を軽減するため、酪農を中心に農作業受託組織（コントラクター）やTMRセンター、酪農ヘルパー組合などの農作業支援組織整備が進められています。

### （1）コントラクター（農作業受託組織）

令和3年に管内で活動しているコントラクターは31組織あり、農業協同組合や株式会社、農事組合法人、営農集団など多様な形態で運営されています。

また、コントラクターでは、牧草や飼料用とうもろこしの収穫をはじめ、堆肥の切り返し・散布・耕起作業、心土破碎、草地更新作業など様々な農作業を請け負い、委託農家の労働力負担の軽減を図っています。

## (2) TMRセンター

TMRセンターは、酪農経営の規模拡大に伴い、飼料生産を外部化して乳牛管理に重点を置いた経営とするため、飼料生産からTMRの調整・供給までを行う組織で、良質粗飼料の安定的な確保を図り、構成する酪農家の経営改善を図ることを主な目的としています。

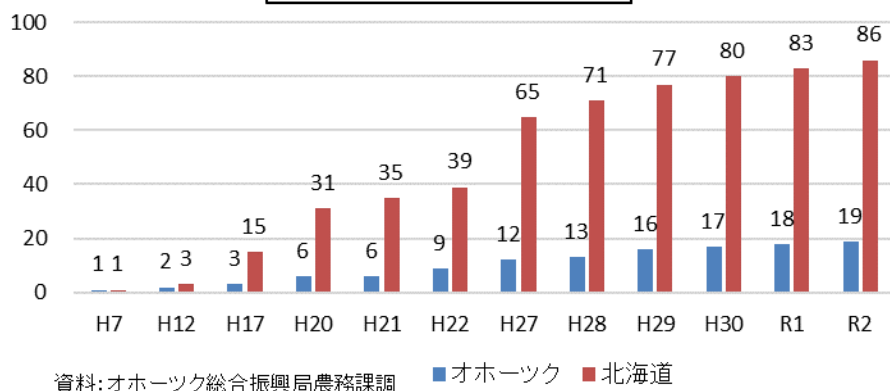
管内には令和4年3月現在、19組織が設立されており、近年増加傾向にあります。

TMRセンターの利用により、飼料の収穫・調製・給与に係る時間の短縮、良質なTMRの供給による1頭当たり乳量の増加など、一定の成果を上げています。

### ■管内TMRセンター一覧

TMRセンター名	開始年	市町村
(有)オコッペフィードサービス	平成11年	興部町
(農)東もことTMRセンター	平成15年	大空町
(有)アグリサポートばろう	平成18年	湧別町
(同)K'sフィードサービス	平成19年	訓子府町
(株)西興部グラスフィードファクトリー	平成19年	西興部村
(同)雄勝フィードサービス	平成22年	置戸町
佐呂間町農業協同組合	平成22年	佐呂間町
(同)秋里TMRセンター	平成22年	興部町
(株)ドリームゆうべつ	平成23年	湧別町
(株)こしみずエコフィードサービス	平成24年	小清水町
(有)だいち	平成25年	津別町
(農)瑞穂	平成27年	北見市
(同)ほっくんフィードセンター	平成27年	訓子府町
(株)オホーツクTMRセンター	平成27年	興部町
(同)Dream Feed Kitami	平成29年	北見市
(同)温根湯サイレージサービス	平成29年	北見市
(同)上置戸フィードサービス	平成30年	置戸町
U2デーリィコンシェル(株)	平成30年	興部町
(株)沙留TMRセンター	平成30年	興部町

TMRセンター組織数の推移



### (3) 酪農ヘルパー利用組合

酪農ヘルパー利用組合は、酪農経営の厳しい労働条件を緩和し、定期的に休日を確保したり、病気・事故の際に、酪農家に代わって搾乳などの飼養管理を行うヘルパーを派遣する組織です。

管内では全市町村をカバーする 16 組合が組織され、利用組合参加率は 94.6%となっています。

また、1 戸あたり年間利用日数は 27.3 日と、前年に比べ 1.2 日減少しています。

#### ■酪農ヘルパー事業の実施状況（令和 3 年 8 月 1 日現在）

	組合数	専任ヘルパー数 (人)	加入農家戸数 (戸)	加入率 (%)	1 戸当たり年間 利用日数※
オホーツク総合振興局	16	82	699	94.6%	27.3
北海道	86	456	4,741	91.1%	23.6

資料：(社) 酪農ヘルパー全国協会調べ

※ 令和 2 年度の利用日数

### (4) 哺育・育成センター

哺育・育成センターは、酪農経営の規模拡大に伴い、哺育・育成部門を外部化して乳牛管理に重点を置いた経営とするため、各農家の哺育・育成業務を集約的に担う組織で、構成する酪農家の労働負担軽減を図ることを主な目的としています。

管内では個人での哺育・育成受入経営体も合わせて、13 か所で組織されています。

#### ■哺育・育成センター設置状況（令和 3 年度）

区 分	哺育・育成 受託箇所数	利用戸数（戸）	頭数規模（頭）
オホーツク総合振興局	13	107	3,958
北海道	93	954	36,442

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

## トピックス②【農村を支える多様な担い手確保推進事業】

管内の農業者数は減少の一途であり、農家子弟の農業後継者確保だけではなく第三者継承を行う新規参入者や雇用労働者を確保しなければ、地域コミュニティの衰退とともに地域農業の共同活動も失われ、遊休農地の発生など農業生産自体の衰退も懸念される状況となっています。

これまで、農外からの新規参入者の確保については、土地利用型作物での経営継承を中心に取り組んできたところですが、従来型の大規模畑作・酪農経営だけではない、多様な就農形態の可能性を示すことにより、担い手確保対策の間口を広げていく必要があることから、オホーツク総合振興局では、令和4年度から独自事業として「農村を支える多様な担い手確保推進事業」を実施しています。

具体的な取組内容としては、管内の市町村・関係団体と就農可能地等の情報共有や就農希望者確保のためのPR活動、多様な就農のための実態調査などです。

就農希望者確保のためのPR活動として、道内外の就農フェアに3回出展しオホーツクの農業や就農について紹介したほか、東京農業大学オホーツクキャンパスの学生向けに新規就農や雇用就農などを紹介する就農セミナーを開催しました。

また、定年及び若年層の退職予定自衛官向けに、再就職先として農業分野を紹介するため、説明会や現場体験会を開催しました。

今後も引き続き、管内の市町村・関係団体と情報共有やPR活動を実施するとともに、多様な就農形態の検討に向けた取組を実施していく予定です。



就農フェアへの出展の様子



退職予定自衛官向けの説明会の様子





### トピックス③【令和4年度畜産GAP研修会の開催】

GAP（農業生産工程管理）に取り組むことは、生産工程を適切に管理することができるとともに、安全性の高い食品や労働環境の整備、よりよい農場づくりにも活かされます。

オホーツク管内では、農業団体や試験研究機関、普及センター、行政からなる「オホーツク地域GAP導入推進会議」を平成29年に設置し、GAPの導入推進に向けて取り組んできました。

管内の畜産分野においては、先駆的にGAPに取り組む農場はあるものの、生産者や関係団体に広く浸透していないため、畜産GAPの普及に向けて令和元年度から毎年、セミナーや研修会等を開催してきました。

今年度はGAPの考えを取り入れた安全で働きやすい農場づくりを推進するため、「畜産GAP研修会」を遠紋地区酪農法人会と共催で開催しました。

研修会では、畜産GAPの基礎知識についての情報提供や、実際に畜産GAPを取得した牧場（別海町）から、畜産GAPに取り組んだ経緯や手順、取得した後の効果、GAPを活用した働きやすい農場づくりについて講演を行い、当日は41名の方に参加いただきました。

参加者からのアンケートでは「GAPを身近に感じる事ができた」などの声があり、畜産GAPについての理解を深めることができました。

今後も管内のGAP導入推進に向け、情報共有や事例紹介などを行っていきます。



畜産GAP研修会の会場の様子



講師による牧場の事例紹介

# V 農 産

## 1 稲 作

オホーツク地域は、水稻生育上、厳しい気象条件であることから、他作物への転換が進み、水稻の作付面積は減少傾向が続いている一方で、冷涼な気候を活かしたもち米の産地が形成されています。

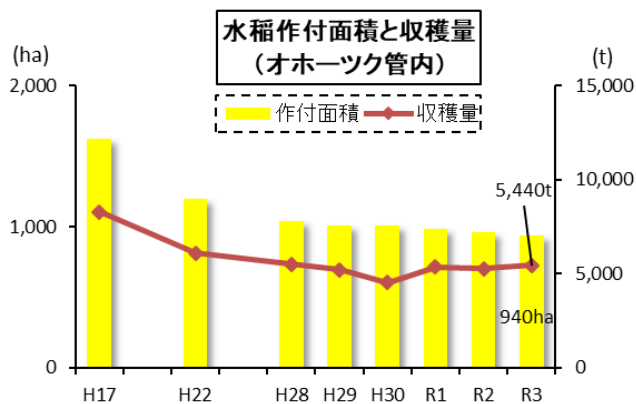
オホーツク管内の令和3年産の水稻作付面積は940haと、前年から約22ha減少しました。生育については、移植後の5月中下旬の低温により活着がやや不良だったものの、6月～7月は高温で推移したため生育は順調に進みました。8月以降も登熟は順調に進み、

収穫作業は平年より早く終了しました。

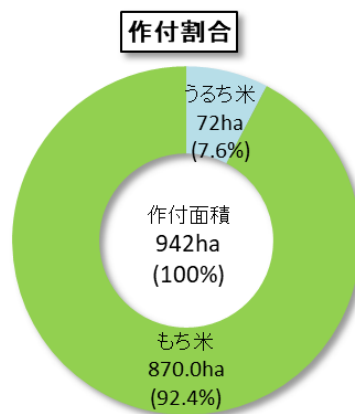
穂数は平年より多く、稔実歩合、千粒重は平年並、登熟歩合も平年並となり、製品数量は平年より多くなりました。収穫量も5,440トンと前年から約170トン増加し、オホーツク・十勝地区の作況指数は「113」と3年連続の良となり、全道平均の「108」も上回りました。

オホーツク地域の水稲の作付けはもち米が主体であり、もち・うるちの割合は、令和3年産では、もち米が92.4%、うるち米が7.6%となりました。

管内のもち米の品種は、北海道優良品種に平成21年に認定された耐冷性に優れる「きたゆきもち」に全面的に切り替わっており、品種別の生産量は道内一、もち米全体でも上川管内に次ぐ第2位の産地となっています。



資料：農林水産省「作物統計調査」



資料：北海道農政部調べ

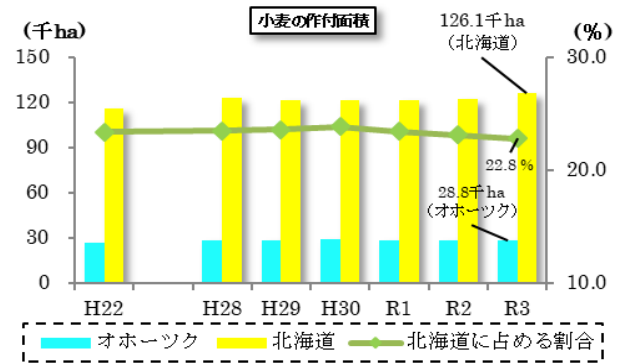
## 2 畑 作

### (1) 麦類

小麦は、輪作体系上の基幹作物であり、令和3年産の管内の作付面積は28,800haとほぼ横ばいで推移し、全道小麦作付面積に占める割合は22.8%となっています。

令和3年産の生育は、5月中下旬に低温となり生育はやや遅れたものの、6月以降は高温で推移し生育は順調に進み、収穫期も好天に恵まれたことから、収穫作業も平年より早く終了しました。

秋まき小麦では一穂粒数は平年並、千粒重はやや軽かったものの、穂数も多く平年を上回ったことから収量は多くなり、小麦全体では、10a当たりの収量は653kg、収穫量は188,000tとなりました。

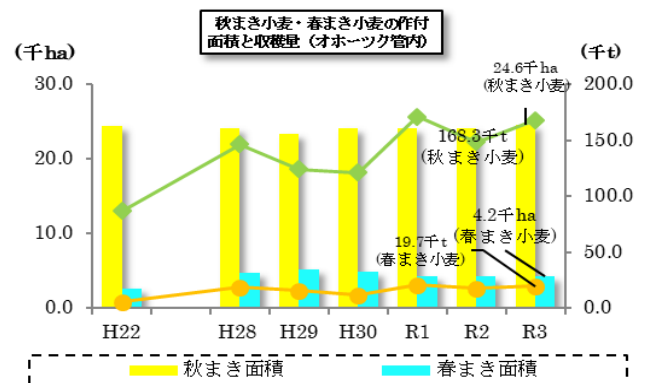


資料：農林水産省「作物統計調

#### ○秋まき小麦

令和3年産の作付面積は24,600haとなり、前年から400ha増加しました。収穫量は168,300tと、豊作年であった前年に比べ19,800t増加しました。10a当たりの収量は685kgと前年の615kgを上回り、平年を上回る収量となりました。

品種は日本めん用の「きたほなみ」が主であり、一部地域では超強力系小麦の「ゆめちから」なども作付けされています。



資料：農林水産省「作物統計調

#### ○春まき小麦

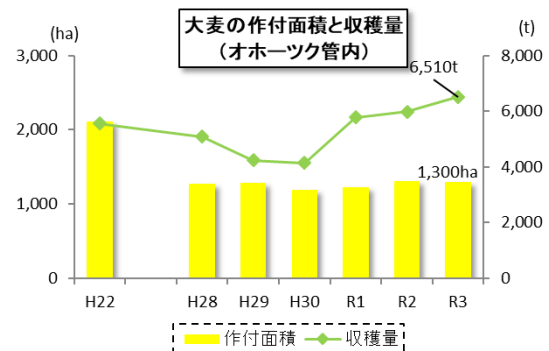
令和3年産の作付面積は4,210haで、前年と同等の面積となりました。収穫量は19,700tと前年に比べ2,200t増加、10a当たりの収量は467kgと前年の419kgを上回り、平年を上回る収量となりました。

品種はパン・中華めん用の「春よ恋」が主であり、北見地域及び斜網地域を中心に作付けされています。

#### ○大麦

令和3年産の大麦の作付面積は1,300haと前年とほぼ変わらず、収穫量は6,510t、10a当たり収量は500kgとなり、いずれも前年を上回りました。

管内では、ビールの原料となる二条大麦が作付けされており、ほぼ全量が契約栽培となっています。北海道全体の約7割がオホーツク管内で作付けされており、主な品種は「札育2号」となっています。



資料：北海道農政事務所ホームページより  
令和3年はオホーツク総合振興局調べ

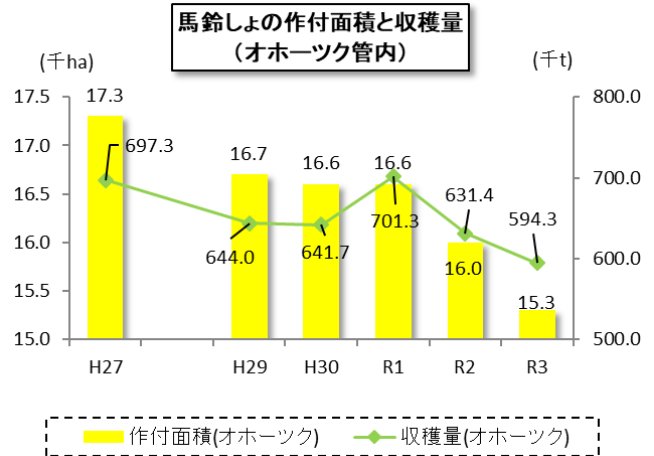
## (2) 馬鈴しょ

馬鈴しょは、オホーツク管内の畑作において輪作体系を構成する主要な作目の一つとなっており、令和3年産の全道の作付面積の約3割、収穫量の4割近くを占めており、面積、収穫量ともに4割以上を占める十勝地方に次いで、本道における主要な産地となっています。一方で、生産者の高齢化や経営規模の拡大に伴う労働力不足、他品目への作付転換等により、その作付面積は近年減少傾向にあります。

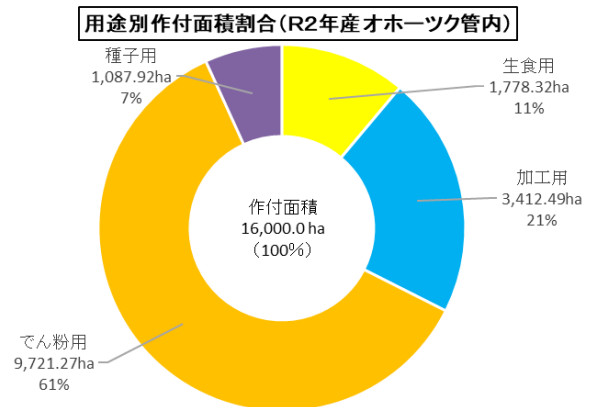
令和3年産の作付面積は、前年から700ha減少し15,300haとなり、収穫量については、前年から37,100t減少の594,300tとなりました。10a当たり収量については、高温少雨の影響があったものの、平均収量対比（直近7か年のうち、最高及び最低値を除いた5か年の平均値）で98%の3,890kg/10aとなりました。

用途別に見ると、でん粉原料用の作付面積割合が高いことが管内の特徴で、令和2年産は全面積の約6割を占めており、管内の5工場（農協系4工場、商系1工場：令和3年産時点）ででん粉生産が行われています。

なお、馬鈴しょの生産に重大な影響を与える害虫である「ジャガイモシストセンチュウ」は、管内では、昭和52年（1977年）に初めて発生が確認されて以降、その発生が確認され続けています。そのまん延防止対策として、でん粉原料用品種を中心に抵抗性品種の作付が進んでおり、「コナヒメ」や「コナユタカ」の作付面積が増加傾向にあります。



資料：農林水産省「作物統計調査」



資料：北海道農政部生産振興局農産振興課調べ

注：主要品種（全道で500ha以上の品種）のみ集計

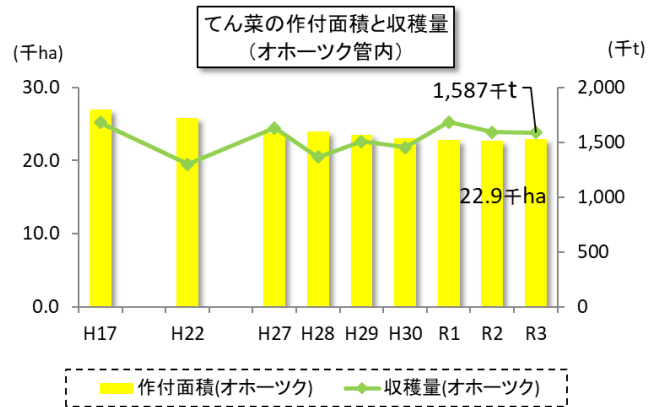
### (3) てん菜

砂糖の原料となるてん菜は、畑作の基幹的な輪作作物となっており、令和3年産の作付面積は22,900ha、収穫量は1,587千tと、いずれも前年とほぼ同じとなっています。作付面積は全道の約4割で、十勝管内に次ぐ規模となっています。

6月から7月にかけての少雨により生育は停滞したものの、8月以降のまとまった降雨により根周は回復したことなどから、10a当たり収量は6,940kg/10aと、前年とほぼ同じ水準となりました。一方、糖度については、9月にかけての気温が平年より高かったことや、根周が急激に肥大したことなどから、前年より0.6%低い16.1%となりました。

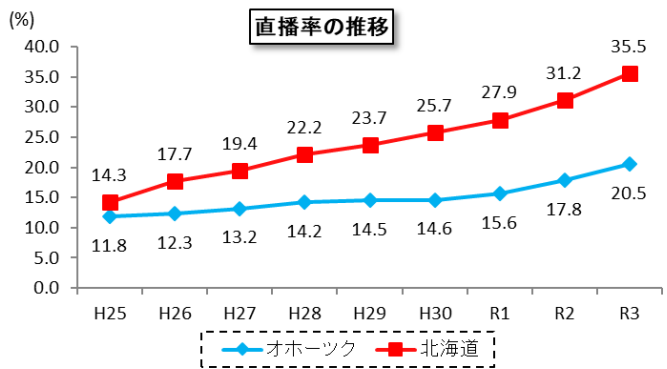
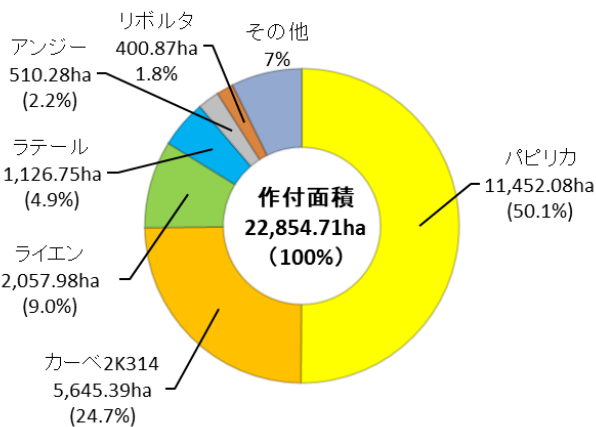
品種は出荷する製糖工場によって異なっていますが、高糖分・病害虫抵抗性の品種が広く作付されています。

てん菜の栽培方法のうち直播栽培については、移植栽培と比べて収量性が劣る一方、経営面積の拡大が進む中、作業の軽減が図られる栽培方法として、北見地域や東紋地域を中心に拡大が見られます。令和3年には管内のてん菜作付面積の20.5%が直播栽培となっています。



資料: 農林水産省北海道農政事務所ホームページより

管内てん菜の品種別作付割合



資料: 北海道農政生産振興局農産振興課調べ

資料: 北海道農政生産振興局農産振興課調べ。  
品種別面積は作付統計調査と一致しない。

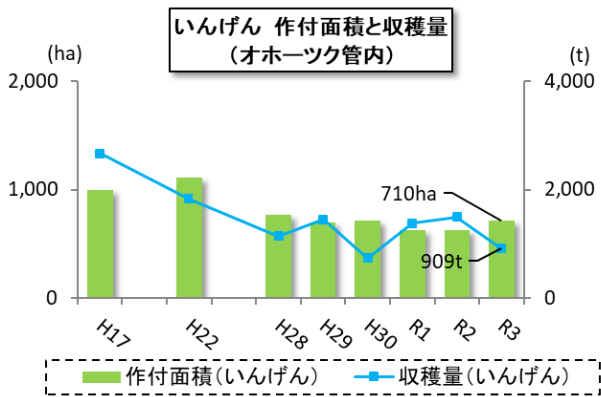
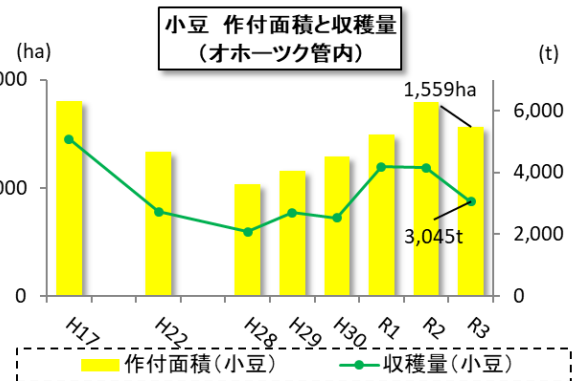
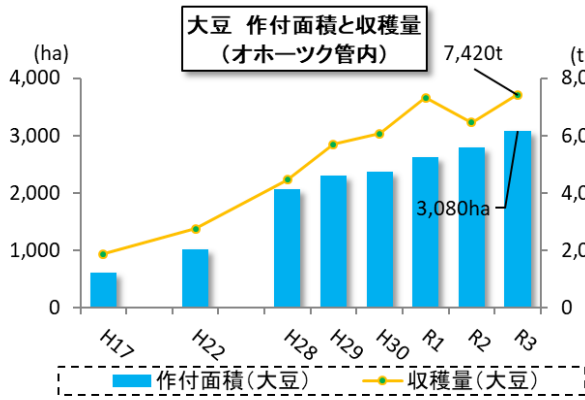


#### (4) 豆類

大豆を含む豆類は、適正な輪作体系を維持する上で重要な作物となっています。大豆は、かつては冷涼な気候のオホーツク管内では収量が不安定であったため、小麦等に転換されてきましたが、管内に適した大豆品種が育成されたことなどにより作付けは近年増えています。令和3年産の大豆の作付面積は3,080ha、収穫量は7,420t、10a当たり収量は241kgとなり、いずれも前年から増加しています。

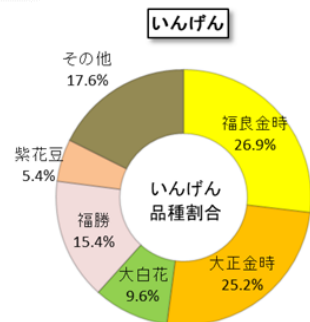
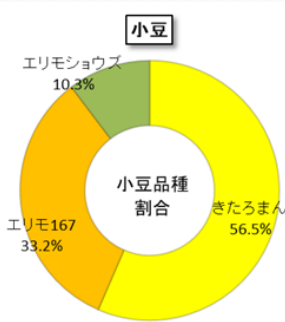
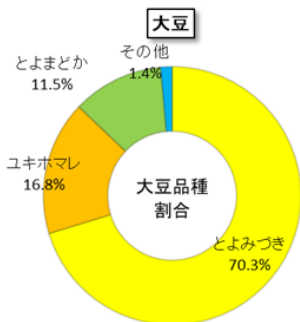
小豆は作付面積や収穫量の変動が大きくなっています。平成28年産から作付面積は増加傾向にありましたが、新型コロナウイルスによる需要減少の影響もあり、令和3年産の作付面積は1,559ha、収穫量は3,045tといずれも前年から減少しています。

いんげんの作付面積は減少傾向にありましたが、令和3年の作付面積は710haと前年からやや増加しましたが、高温の影響により収量は909tと前年から減少しています。オホーツク管内では主に北見市で白花豆や紫花豆などの高級菜豆も栽培されており、振興局別の栽培面積は全道一となっています。



資料：大豆は農林水産省「作物統計調査」  
小豆・いんげんは平成18年産までは「作物統計調査」、  
平成19年産以降はオホーツク総合振興局調べ

オホーツク管内主要品種作付面積割合(令和3年産)



資料：オホーツク総合振興局農務課調べ

### 3 園 芸

#### (1) 野菜

野菜類は、高収益作物として各地域で農業経営の中に取り入れられており、管内の令和3年産の作付面積は10,038haとなっています。作付割合は、たまねぎなどの葉茎菜類が74.5%、にんじんなどの根菜類が13.8%、スイートコーンやかぼちゃなどの果菜類が11.6%、メロンなどの果実的野菜類が0.1%となっています。

品目別の作付面積は、管内の主要な作物であるたまねぎが最も多く7,246.2haと全体の72.2%を占めており、次いでにんじん1,105.2ha、スイートコーン665.1ha、かぼちゃ496.2haとなっています。

地域別の作付面積では、北見市、訓子府町などの北見地域ではたまねぎ、湧別町、佐呂間町などの遠紋地域ではかぼちゃ、斜里町、美幌町などの斜網地域ではにんじんが多く、地域の特性を活かした産地が形成されています。

管内野菜作付面積と収穫量

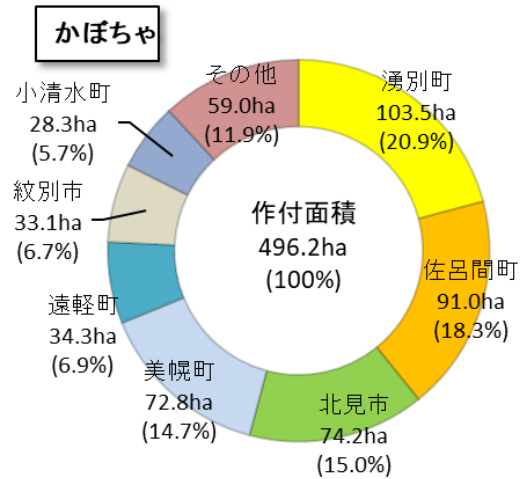
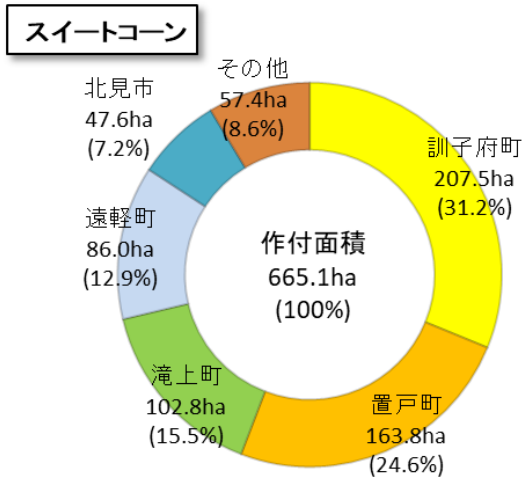
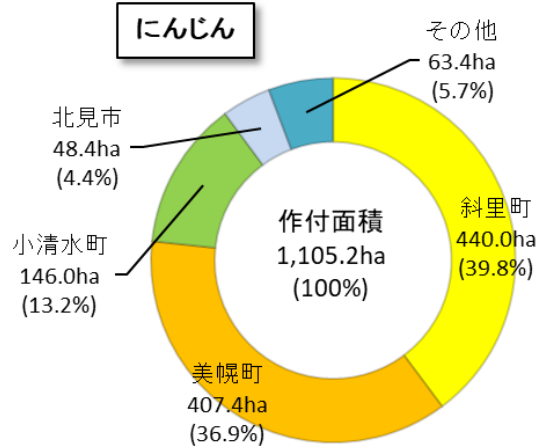
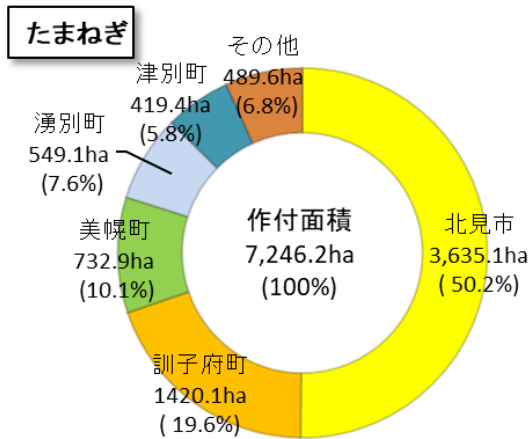
	作付面積 (ha)			収穫量 (t)		
	R2	R3	前年比 (%)	R2	R3	前年比 (%)
たまねぎ	7,396.8	7,246.2	98.0	471,164.3	325,295.4	69.0
はくさい	25.7	24.6	95.7	1,394.8	1,390.6	99.7
キャベツ	53.1	50.6	95.3	2,671.1	2,600.4	97.4
アスパラガス	41.7	40.9	98.1	119.5	134.5	112.6
ブロッコリー	80.3	79.5	99.0	610.1	481.6	78.9
ほうれんそう	2.6	1.9	73.1	41.9	32.0	76.4
レタス	3.0	2.8	93.3	104.0	76.2	73.3
ねぎ	6.3	5.3	84.1	288.5	269.4	93.4
その他 <sup>1)</sup>	24.4	27.6	113.1	120.9	130.9	108.3
葉茎菜類計	7,633.9	7,479.4	98.0	476,515.1	330,411.0	69.3
スイートコーン	707.1	665.1	94.1	9,188.3	7,217.7	78.6
かぼちゃ	520.1	496.2	95.4	7,427.6	6,672.4	89.8
その他 <sup>2)</sup>	5.1	4.2	82.4	212.0	186.1	87.8
果菜類計	1,232.3	1,165.5	94.6	16,827.9	14,076.2	83.6
にんじん	1,094.3	1,105.2	101.0	43,750.4	45,317.3	103.6
だいこん	69.0	33.7	48.8	881.2	605.9	68.8
ごぼう	105.9	104.6	98.8	2,475.7	2,719.2	109.8
ながいも	115.9	131.8	113.7	3,162.8	2,316.1	73.2
かぶ	12.8	10.2	79.7	155.0	303.2	195.6
根菜類計	1,397.9	1,385.5	99.1	50,425.1	51,261.7	101.7
果実的野菜計 <sup>3)</sup>	8.1	7.0	86.4	191.4	160.5	83.9
その他野菜 <sup>4)</sup>	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
野菜計	10,272.2	10,037.4	97.7	543,959.5	395,909.4	72.8

資料:北海道農政部「主要野菜作付実態調査」

注1)こまつな、にら、にんにく 2)トマト、ピーマン、さやいんげん、さやえんどう、えだまめ 3)いちご、スイカ、メロン

4)ゆりね

## オホーツク管内主要野菜市町村別作付割合(令和3年産)

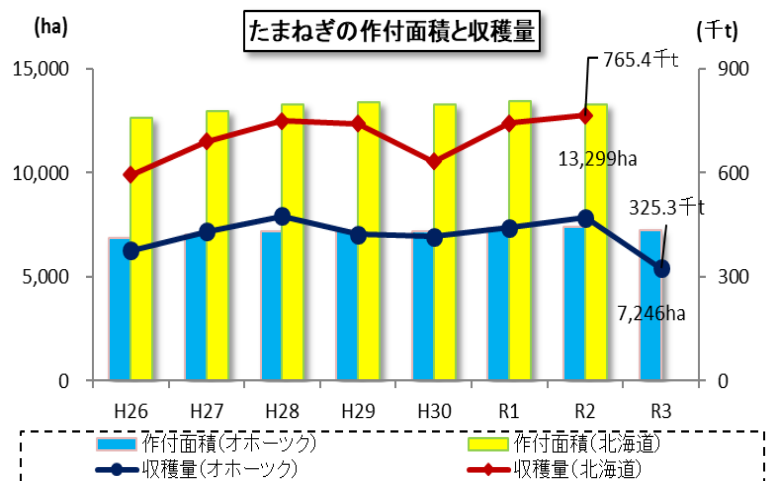


資料：北海道農政部「主要野菜作付実態調査」  
 ※四捨五入により合計値と内訳が一致しないことがある。

### ○ たまねぎ

管内のたまねぎの作付面積は全道の5割強の面積を占め、全国一の産地となっています。近年では、一次加工による高付加価値化、契約取引の推進や長期出荷の取組、集出荷体制の効率化など、さらなる産地強化に向けた取組が進められています。

令和3年産のたまねぎの作付面積は前年度とほぼ同じ7,246haでした。6月以降晴天が続いたため、倒伏や枯葉は平年より早く進みましたが、極端な高温少雨により球径は平年より小さく、規格内収量も平年を下回りました。収穫量は325.3千tと前年から減少しました。



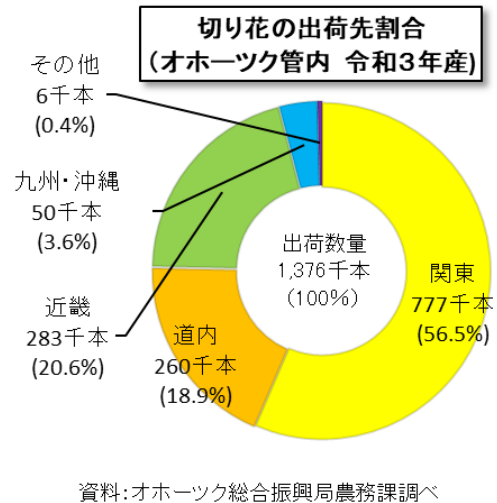
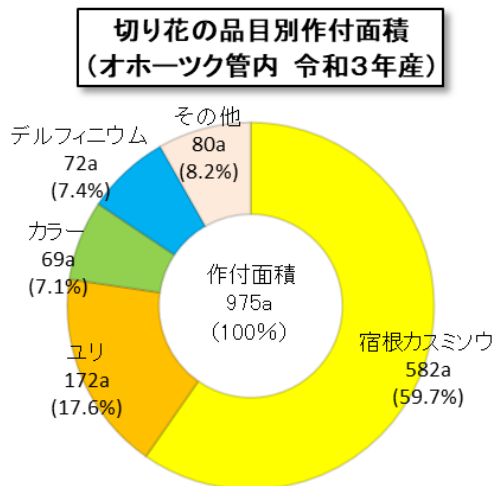
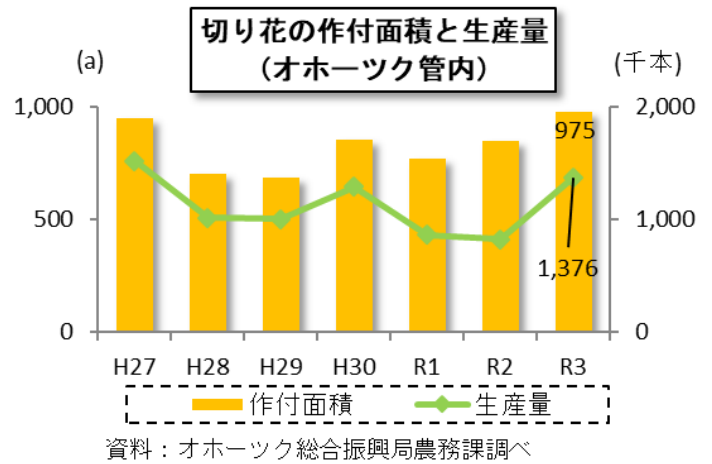
資料：北海道農政部「主要野菜作付実態調査」

## (2) 花き

管内では、冷涼な気候を活かした花き生産が行われています。切り花の生産面積は大空町が管内の約68%を占めており、その他、小清水町、美幌町、斜里町、北見市、津別町、清里町でも生産されています、また、花木類も一部市町村で栽培が行われています。

令和3年の切り花の作付面積は975aで、宿根カスミソウ、ユリ、カラー、デルフィニウムで管内の約9割を占めています。

出荷先は道外が中心となっており、関東圏が56.5%、近畿圏が19.8%となっているほか、九州・沖縄圏にも出荷されています。道内向けの出荷は21.6%となっており、道外向け・道内向けの割合は例年概ね同じとなっています。



## (3) 果樹

管内では、りんご、ぶどう、おうとう（さくらんぼ）などが栽培されており、主な生産地は、りんごは北見市、ぶどうは北見市、置戸町、おうとうは北見市、網走市となっており、果樹園の中には、収穫体験ができる観光農園もあります。

また、近年の新たな動きとして、醸造用ぶどうの栽培とともに、ワインの醸造をおこなうワイナリーがオホーツク管内でも作られています。

#### (4) 特用作物等

管内では、冷涼な気候を活かし、香料向けの青しそ・はっか、薬用作物であるセンキュウ、トウキなどの特用作物が栽培されています。

このうち、開拓期から生産されているはっかは、昭和10年代には世界の80%のシェアを占め、その後合成香料の登場などにより、作付面積は大きく減少しましたが、近年は、加工食品の原料としての需要が高まっています。

青しそは、香料メーカーとの契約により北見市や遠軽町で主に栽培されており、しそ油として出荷されています。センキュウ・トウキなどの薬用作物は、主に網走市で、生薬会社との契約栽培が行われています。

特用作物等の作付面積（令和3年、1ha以上）

品 目	作付面積(ha)	作付市町村
センキュウ	14.2	網走市
トウキ	1.9	網走市
しそ	97.2	北見市、佐呂間町、遠軽町
和種はっか	5.5	滝上町

資料：オホーツク総合振興局農務課調べ